

— 次の①～⑥の傍線部のひらがなを漢字に直しなさい。送り仮名も必要な場合はかくこと。⑦～⑩の傍線部の漢字はひらがなに直しなさい。

- ① ようりようよく仕事を終わらせる。
- ② 書いた絵をじがじさんする。
- ③ 努力してさいきをはかる。
- ④ 住所をとうろくする。
- ⑤ 彼女はこころざしの高い人だ。
- ⑥ 受付を一階にもうける。
- ⑦ 研究の大事な要となる人物。
- ⑧ 雑木林を毎日歩くのが好きだ。
- ⑨ その考え方は非常に安易だ。
- ⑩ 真綿を使ったふとんで寝る。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近ごろでは、下宿ははやらない。枝から離れて降りそそぐ紅葉のごとき勢いで空き部屋が増え、早雲荘の下宿人は、いまやとうとう馬諦だけだ。それをいいことに、馬諦は隣の部屋、そのまた隣の部屋へせっせと本を運び入れた。しまいには本の侵攻に負け、大家のタケばあさんすらも、一階の階段脇の部屋から二階へ移り住む事態となった。

タケばあさんはひとがいいので、快く二階への引越しに応じてくれた。

「みっちゃん为天井まである書棚を設置してくれたおかげで、早雲荘はたくさん柱が立っているようなもんだよ。地震が来ても安心だ」

柱の重みで、早雲荘は土台から崩壊しそうなのだが、馬諦もタケばあさんも細かいことはあまり気にしない。大家のタケばあさんが催促せず、店子も凶抜けてほんやりしているものだから、結局、馬諦は一部屋ぶんの家賃しか払っていない。

こうして、馬諦は一階の全室を本で埋めつくし、タケばあさんは二階の全室をつかって悠々と、早雲荘で暮らしているのだった。

もし、部屋がいくばくかでも、そこに住むものの内面を表すのだとしたら。俺は言葉を溜めこむばかりで使いこなせない、埃っぽい無味乾燥人間ということになる。

馬諦は押入から、「ヌッポロ一番 しょうゆ味」を一袋取り出した。近所のディスカウントショップで箱売りされていた、格安だが偽物臭のするインスタントラーメンだ。袋の説明書は、「五百リッターの水は沸点まで到達します」「投入した麺をほぐすがよい」「卵、ネギ、ハムなどお好みです」といった調子である。五百リッターの水はいくらなんでも多いと思うが、文章から真剣さが伝わるので馬諦は気に入り、このところ「ヌッポロ一番」を頻繁に食べている。

袋をぶらさげ、建て付けの悪いドアを開けて、共用の台所に向かう。トラさんもついてきた。板張りの床は、歩きたび、船底みたいに軋みを上げる。

流しの下の戸棚をかきまわし、トラさんのニボシを探しているところへ、二階から声がかかった。「みっちゃん、帰ってたのかい」

「はい。さきほど帰りました」

②振り仰ぐと、二階の廊下から階段へ身を乗りだすようにして、タケばあさんが顔を覗かせている。「煮物を作りすぎちゃったんだよ。これから夕飯だから、よかったらみっちゃんも食べていって」

「ありがとうございます。では、ご相伴にあずかることにします」

ラーメンとニボシの袋を両手にぶらさげ、階段を上る。トラさんもついてきた。

タケばあさんの居間は、階段を上がつてすぐの六畳間だ。隣の部屋は寝室、そのまた隣の部屋は客間として利用している。とはいえ、タケばあさんを訪ねてくるひとはほとんどいない。客間はほぼ物置と化していた。

便所は各階にあるが、共用の台所やふろや洗濯機置き場がないぶん、二階の方がややこぢんまりしている。そのかわり、窓の外に見晴らしのいい物干し場が貼り出していた。ベランダやバルコニーと言えればいいのだが、木製で塗装もされていない、手すりのついたすのこのようなもので、どうがんばって形容しても物干し場だろう。

「お邪魔します」

スリッパを脱ぎ、タケばあさんの居間に入った馬諦は、そこで足を止めた。窓越しに見える物干し場には、ススキと団子が飾られていた。

そうか、今日は中秋の名月だ。俺が環境の変化に戸惑っているあいだにも、季節は確実に移ろっていたらしい。

馬諦の手からニボシを少し食べたトラさんが、まだ見えぬ月に向かって一声鳴いた。窓を細く開けてやると、物干し場へするりと出ていく。

タケばあさんにうながされるまま、馬諦は小さな卓袱台に向かって正座した。卓上にはほうれん草のおひたしや、鶏肉と里芋の煮物、キュウリの浅漬けなどが並んでいる。

「こういうのもあるよ」

タケばあさんは、肉屋で買ったらしきコロッケも卓袱台に載せた。「若いひとは、煮物だけじゃものたりないだろう」

そう言いながら、新聞紙を下敷きにした鍋から豆腐のみそ汁をよそってくれる。ついで、茶わんにご飯をこんもりと。どれも湯気を立てている。馬諦の帰宅時間を見はからって夕飯の支度をし、さりげなく誘ってくれたのだろうか。がわれた。

「いただきます」

④馬諦は頭を下げた。しばらく、料理を腹に収めることに専念する。タケばあさんはなにも言わない。

「気落ちしているように見えましたが」

浅漬けを咀嚼し終え、馬諦は尋ねた。

「見えるねえ」

タケばあさんはみそ汁をすする。「仕事が大変なのかい」

「決めなければならぬことが多すぎて、頭が破裂しそうです」

「あらま、脳みそだけが取り柄のみっちゃんがねえ」

⑤ひどいな、と思わなくもなかったが、たしかに馬諦は、学び、考える事以外に、さして得意なものがないのだった。「脳みそだけが問題なのです」

馬諦は、電灯に照り映える飯粒を眺めた。「営業部では、やるべきことが決まっていたし、基本的には一人で書店をまわればよかった。到達すべき目標が明確で、自分が努力すればいいだけですから、気楽といえば気楽でした。し

かし、辞書を作るとなると、そうはいかない。全員で考え、工夫し、作業を分担する必要がある」

「そのどこが問題なのさ」

「俺は、考えることはいくらでもできますが、なにを考えたのかをひとに説明するのがうまくない。端的に言って、辞書編集部内で浮いているんです」

タケばあさんは、あきれたと言いたげに首を振った。

「みっちゃん。いままであなたが、浮いていなかったことがあるのかい。本ばかり読んで、ここにだって友だちも彼女も一人も連れてきたことがないじゃないか」

「いませんから」

「だったらいまさら、なんで浮いていることに気を病むのかねえ」

そういえば、なぜなんだろう。

馬諦はこれまでずっと、「変わったやつ」という立ち位置だった。学生生活においても会社員生活においても、どこか遠巻きにされていた。たまに好奇心と好意から話しかけられるひとがいても、馬諦の受け答えがあまりにトンチンカンなためか、薄笑いを浮かべてすぐに去ってってしまう。馬諦本人は真面目に、心を開いて応対しているつもりなのだが、どうもうまくいかない。

⑥ それがつらくて、本を読むようになった。どんな話下手でも、本が相手なら落ち着いて、深く静かに対話できる。もうひとつ、学校の休み時間に本を開いていれば、級友から迂闊に話しかけられないという利点もあった。

読書のおかげか、馬諦の成績はぐんぐん上がった。心を伝達する手段である「言葉」に興味を抱き、大学では言語学を専攻した。

いくら知識としての言葉を集めてみても、うまく伝えられないのはあいかわらずだった。むなしいけれど、しかたがない。伝わらないという事実を、馬諦は諦めとともに半ば受け入れていたのだが、辞書編集部に異動になって欲

出た。

「みっちゃんは、職場のひとと仲良くなりたんだね。仲良くなって、いい辞書を作りたいんだ」

タケばあさんに言われ、馬諦は驚いて顔を上げた。

伝えたい。つながりたい。

⑦ 自分の内心に渦巻く感情は、まさしくそういうことだと思いついたからだ。

(三浦しおん『舟を編む』より。問題用に一部改編している)

【注】 * 相伴……………客の一人として接待を受けること。

* 咀嚼……………食物をかみ砕くこと。

* 端的……………てっとり早い様子だ。

* 迂闊……………不注意のため不結果を招きがちである様子。

問一 ——部①「言葉を溜めこむばかりで使いこなせない」とあるが、この状態に重なる「馬諦」の特徴を表す表現を本文中から二十五字以上三十字以内で書き抜きなさい。

問二 ——部②「振り仰ぐ」とはどのような動作か。簡潔に述べなさい。

問三 — 部③「環境の変化」に当たるものとして最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 親しい人との別れ
- イ 住居の建て替え
- ウ 職場の移動
- エ 入院生活からの復帰

問四 — 部④「気落ちしているように見えましたが」とたずねたのはなぜか。解答用紙の形式にしたがい、「タケバあさんがくから。」の形になるよう、本文中から抜き出しなさい。

- 問五 — 部⑤「脳みそだけが問題」とはどういうことか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。
- ア 自分の思いを分析的にとらえてしまう
 - イ 知識のみたまつていく
 - ウ 空想のみで実態が存在しない
 - エ 自分の思いを伝えることができない

問六 — 部⑥「それがつらくて」とあるが、「それ」が指し示す内容として当てはまるものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 静かな対話を望むことが許されない
- イ 自分では心を開いているつもりだがうまくいかない
- ウ 周囲からの同情と蔑みがわからない

- エ 自分では本を読むことで満足している
- オ 話しかけられているのにうまく応えられない

問七 — 部⑦「まさしくそういうことだ」とはどういうことか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①私に親しいある老科学者がある日私に次のようなことを語って聞かせた。
②「科学者になるには『あたま』がよくなくてはいけない」これは普通世人の口にする一つの命題である。これはある意味ではほんとうだと思われる。しかし、一方でまた「科学者はあたまが悪くなくてはいけない」という命題も、ある意味ではやはりほんとうである。そうしてこの後のほうの命題は、それを指摘し解説する人が比較的少数である。

③この一見相反する二つの命題は実は一つのものの互いに対立し共存する二つの半面を表現するものである。この見かけ上のパラドックスは、実は「あたま」という言葉の内容に関する定義の曖昧不鮮明から生まれることはもちろんである。

④論理の連鎖のただ一つの輪をも取り失わないように、また混乱の中に部分と全体との関係を見失わないようにするためには、正確でかつ緻密な頭脳を要する。紛糾した可能性の岐路に立ったときに、取るべき道を誤らないためには前途を見透す内察と直観の力を持たなければならぬ。 X この意味ではたしかに科学者は「あたま」がよくなくてはならないのである。

⑤しかしまた、普通にいわゆる常識的にわかりきったと思われることで、そうして、普通の意味でいわゆるあたまの悪い人にも容易にわかったと思われるような尋常茶飯事の中に、何かしら不可解な疑点を認めそうしてその闡明に苦吟するというのが、単なる科学教育者にはとにかく、科学的研究に従事する者にはさらにいっそう重要必須なことである。この点で科学者は、普通の頭の悪い人よりも、もっとも物わかりの悪いのみ込みの悪い田舎者であり、^① 朴念仁でなければならぬ。

⑥いわゆる A は、言わば足の早い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かない所へ行き着くこともできる代わりに、途中の道ばたあるいはちよつとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。 B 足ののろい人がずっとあとからおくられて来てわけもなくそのだいたいな宝物を拾って行く場合がある。

⑦頭のいい人は、言わば富士の I まで来て、そこから II をながめただけで、それで富士の III をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登ってみなければわからない。

⑧頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋の前途の Y が見渡される。少なくとも自分でそういう気がする。そのためにややもすると前進する勇気を阻喪しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえって Z 観的である。そうして難関に出会っても存外^②どうかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。

⑨それで、^③ ⑧の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を請うてはいけぬ。きつと前途に重畳する難関を一つ一つしらみつぶしに枚挙されてそうして自分のせつかく楽しみにしている企図の絶望を宣告されるからである。委細かまわず着手してみると存外指摘された難関は楽に始末がついて、指摘されなかった意外な難関に出会うこともある。

(寺田寅彦「科学者とあたま」より。問題用の一部改編している)

【注】

- * 世人 …… 世の中の人。
- * 命題 …… 一つの判断の内容を「AはBだ」のように表したもの。
- * パラドックス …… お互いに矛盾しながらも、どちらも正しいこと。
- * 紛糾 …… 物事がうまくいかず、もつれ乱れること。
- * 内察 …… 物事の内面を見抜くこと。
- * 直観 …… 推理ではなく直接に感じ取り物事の本質をとらえること。
- * 尋常茶飯事 …… 少しもめずらしくないこと。

- * 闡明 …………… はつきりしていなかった意味を明らかにすること。
- * 苦吟 …………… 苦心して詩歌を作ること。ここでは苦心して物事をなしとげようとする事。
- * 朴念仁 …………… わからずや。
- * ややもすると …… どうかすると。
- * 粗相 …………… 気落ちすること。
- * 研学の徒 …………… 学問の道を志す者。
- * 重畳 …………… 何重にも重なること。
- * しらみつぶし …… 小さなことも残さず一つ一つすべて処理すること。
- * 枚举 …………… 一つ一つ数え上げること。
- * 企図 …………… くわだて。計画。
- * 委細かまわず …… 事情にかかわらず。

問一 X に入る言葉として最も適切なものを選び記号で答えなさい。

- ア だが
- イ すなわち
- ウ ところで
- エ さらに

問二 — 部①「もつともつと物わかりの悪いのみ込みの悪い田舎者であり朴念仁でなければならぬ」とあるが、
 どういうことか。最も適切なものを選び記号で答えなさい。

- ア 科学教育者は一般的に常識だとされていることがらに対しても疑問を持つてはいけないということ。
- イ 科学的研究に従事する者は一般的に常識だとされていることがらに対しても疑問を持つてはいけないということ。
- ウ 科学教育者は一般的に常識だとされていることがらに対しても疑問を持たなければならぬということ。
- エ 科学的研究に従事する者は一般的に常識だとされていることがらに対しても疑問を持たなければならぬということ。

問三 A B に入る言葉として最も適切なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 世人
- イ 頭の悪い人
- ウ 普通の頭の悪い人
- エ 頭のいい人

問四 I II III に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを選び記号で答えなさい。

- ア I、頂上 II、すそ野 III、全体
- イ I、頂上 II、全体 III、すそ野
- ウ I、すそ野 II、頂上 III、全体
- エ I、すそ野 II、全体 III、頂上

問五 Y に入る言葉を本文中より漢字二字で抜き出して答えなさい。

問六 Z に入る漢字一字で書きなさい。

問七 — 部②「存外」とあるが、これを言い換えたとき最も適切なものを選び記号で答えなさい。

ア とにかく

イ 思いがけず

ウ おおよそ

エ とはいえ

問八 — 部③「研学の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を請うてはいけない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを選び記号で答えなさい。

ア 頭のいい人は見通しがきくので、予想される困難こんなんを指摘され、研究の妨ままげになるから。

イ 頭のいい人は見通しがきくので、予想される困難の解決方法を指摘され、研究の妨ままげになるから。

ウ 頭のいい人は見通しがきくので、予想される困難を指摘され、研究の手助けになるから。

エ 頭のいい人は見通しがきくので、予想もしなかった困難を指摘され、研究の手助けになるから。

問九 本文の構成について述べたものとして、最も適切なものを選び記号で答えなさい。

ア 形式段落④・⑤は形式段落②で述べられている二つの命題についての具体的な説明となっている。

イ 形式段落⑨は形式段落⑧で述べられている内容を否定している。

ウ 形式段落⑥で述べられていることは、形式段落⑦と対立している。

エ 形式段落③は文章全体の主題を説明している。

四

次の文章を読み、全体の展開をまとめたりえであなたの考えを示しなさい。

「私は嘘つきです」

自分でこう言う人がいるとします。この人は嘘つきか、嘘つきでないか。

嘘つきだとすると、「私は嘘つきです」ということばも嘘なので、正直者ということになる。でも、正直者なら、このことばも正しいはずなので、やっぱり嘘つきになる。この繰り返して、答えが出ません。「エピソードの逆説」と言われる矛盾です。

実際には、「嘘つき」はいつも嘘をつくとは限りません。一般に、嘘をつくことが比較的多ければ、その人は「嘘つき」と称されます。

では、この意味で、あなたは嘘つきでしょうか——いや、こんな質問は失礼ですね。言い直しましょう。最近、嘘をついたことがありますか。

私は、残念ながら、結果として嘘をついてしまうことがあります。

たとえば、自分の部屋で工作中、小学生の娘が「遊んでほしい」とせがんで来たとき。「今、仕事だから待ってなさい。5時になったら遊ぼう」

ところが、5時を過ぎてても仕事が一段落しない。ふたたびやって来た娘に、

「すまんが、もうちょっと待って。6時になったら……」

娘は「嘘つき」とは言いませんが、不信感のこもった目でにらみます。私の見通しが甘かったのです。こうして親子の信頼関係は崩れていきます。

ただ、開き直るようですが、人間のことばというものは、嘘をつかずに済ますことはできないようになっています。たとえば、「太陽が上る」と言います。でも、天文学によれば、動くのは地球のほうです。正確には「地球が自転

した結果、太陽が見える」と言わなければなりません。

あるいは、「毎日元気に学校に行く」と言います。でも、実際には土日は休んでいるのですから、正確には「学校に5日連続で行き、2日休むことを繰り返す」などと言わなくてはならないはずですが。

不正確という意味では、これらも「嘘」です。物事を分かりやすく表現するためには、私たちは嘘を完全に除くことができません。

こんな出来事があったとします。家族とNHKのニュースを見ている時、ちょっとした用事で隣の部屋へ行ったら、家族が「あーっ」と叫んだので、「どうしたの」と隣の部屋から尋ねると、火災事故のニュースがあったらしい。間もなく元の部屋に戻ったが、その時にアナウンサーの最後のことばしか聞けなかった——。

このニュースを人に紹介する場合、右のように言うことややこしくなります。そこで、「テレビのニュースで見た」（本当は見えていない）、「テレビのニュースで知った」（本当は家族に聞いた）などと表現します。厳密にはこれらも「嘘」です。

このように、ことばを使って生活している限り、まったく嘘をつかないわけにはいきません。完全に真実のことだけを言おうとすれば、何も言えなくなってしまいます。

だからといって、私は「嘘をつくのはしかたない、どんどん嘘をつきましょう」と言いたいわけではありません。その逆です。

私たちは、ほうっておくと、どんどん嘘をついてしまいます。不正確な表現が多くなり、曖昧な約束をし、さらには、意図的な嘘をつくことにつながります。そうならないためには、普段から、できるだけ嘘を排除しようと努力することが必要です。

（飯間浩明『辞書編纂者の、日本語を使いこなす技術』より。問題用に一部改編している）

問 筆者の考えを次のようにまとめた。 I V に該当する内容を、書き抜くか、本文中の語句を用いて書きなさい。また、「嘘をつく行為」とはどのようなものであるのか。 VI に、本文で示された内容とは異なるあなたの意見を示しなさい。

「嘘つき」とは一般に I 人のことを言う。まず例示されているのが筆者と娘の話であり、これは「嘘」という行為のなかで、 II 事柄があることを取り上げている。

そのうえで筆者は、 III ことを述べる。この観点からは、「太陽が上る」ことが例示されるが、ここでは「嘘」という行為の中で、不正確と言う意味では「嘘」となってしまいう事柄が取り上げられている。

これらの例にさらに「ニュースの例」を加え、言葉を使って生活をしている限り、 IV ことを、完全に真実のことだけをおおすとすれば、何も言えなくなってしまうということを根拠にして述べている。

しかし筆者は、嘘を許容しているのではなく、 V ということを指摘する。これはほうっておくとどんどん嘘をついてしまうということについて、特に不正確な表現、曖昧な表現、さらには意図的な嘘へ発展してしまうことに着目した上で述べられたものである。

これらが筆者が本文で提示した内容である。そして私は、「嘘をつく行為」を VI と考える。

